

Hampshire Days における W. H. Hudson のエッセイ

W. H. Hudson's Essays in *Hampshire Days*

佐藤 幸正

Yukimasa Satoh

序

1900年から1902年に渡り、Hudsonは何度か Hampshire 州に出かけ、野生生物の観察をしている。その観察対象には鳥類・植物・動物・昆虫をはじめ、風物や村人も含まれており、広範に及ぶ。あたかも作者はその土地に躍動するあらゆる生命を、逃すことなく静観したように見える。その観察結果は1903年、*Hampshire Days* と題して公刊されたが、博物学的なエッセイという点で、*Nature in Downland* (1900) の姉妹編と見なすことができる。採録された対象や、地方の自然を舞台にしているなど、確かに両作品とも多くの類似性を有するのである。しかし、作品の構成や内容を考えてみると、そこにはまた大きな相違も見られる。後者においては動植物などの対象を、各章毎に独立して採録する傾向があったのに対して、前者では各章中に動物や植物等の各対象が、混入される傾向が強い。このような構成上の相違は、作品発表の目的の違いから生じたものと思われる。後者即ち、*Nature in Downland* においては、作者はそれまであまり知られていなかった丘陵地方の博物を読者に紹介し、その魅力を知ってもらおうとしたのであった。従って、観察の行動範囲も広く、対象を秩序立てて記す必要があったと思われる。他方、*Hampshire Days* においては、既にこの地を紹介した著名な作家がいたこともあって、その必要に迫られることはなかった。従って、観察範囲は州内の好きな場所に限定され、その場で観察されたいろいろな対象を、次々とアトランダムに記録したと思われる。内容面から言えば、自然や動植物を客観的に描写する点で、多くの類似性が見られるが、*Hampshire Days* の方には、作者のより積極的な態度が窺われる。失われゆく自然を求め、これと人間との融合に、実人生の最高の喜びや意義を見出す場面は、その一例と言えるであろう。また、過去の民族や、死んだ村人たちへの思いを描いた場面では、彼等に対する作者の感情や同情が前面に押し出され、明確な態度を打ち出している。即ち、対象となる事物を理性だけでは把握し

きれなくなっているところに、前作との相違があるのであり、それがまたこの作品の妙味になっているのである。更に、この作品は以後の作品の萌芽を秘めていることや、また何よりも自然思想の核心に触れていることで、研究上重要な意義を持つのである。以下、この作品のもつ問題点を中心に述べてみたい。

I カッコウの雛の習性

冒頭作者は New Forest を紹介し、その地方の自然美や野生生物について記す。その名の示す通り、そこは森林地ではあるが、一步外へ出れば、荒涼たる湿原が果しなく続く所でもある。過疎地帯でもあることから、野生生物の宝庫として知られ、特に野鳥の卵採集者や、鱗翅目研究者の恰好の場所になっていた。1900年作者はこの地で、カッコウ (cuckoo) の雛鳥の習性を観察する。カッコウは托卵性の鳥で、他の鳥の巣に産卵し、その後の抱卵も育雛も他人まかせであることは、わが国でも古くからよく知られてきた。イギリスでは4月半ば頃、この鳥が南方から渡って来るのであるが、先ず雄の方が一足先に到着し、例の初声を発することになる。他方、雌は雄に比べると鳴き声は劣り、鳴く回数も少ない。この鳥にはまた、自分の卵を嘴に銜えて巣に運ぶ習性のあることもわかっている。卵が体の割にとっても小さいことから、このような飛行が可能なのであろうが、それにしてもその奇妙な習性には驚かされるのである。カッコウが産卵する相手は、イギリスの場合、ヨーロッパカヤクグリ (hedge sparrow), ヨシキリ (reed warbler), ハクセキレイ (pied wagtail), マキバタヒバリ (meadow pipit) など、小鳥類の巣である。このような小鳥の¹巣を選ぶと、カッコウは通例一箇の卵を産むのである。

この産み落されたカッコウの卵は、その後一体どのような過程を経て、巣立つのであろうか。作者はこれについて、New Forest で観察した結果を、詳述している。1900年5月19日、彼はヨーロッパコマドリ (robin) の巢中に、この鳥の卵3箇と、カッコウの卵1箇を発見する。カッコウの卵は何日前に産み落されたか不明であっ

たが5月27日には他の卵に先駆けて孵化する。カッコウの卵が他に先駆けて孵化するという事は、注目すべきことであり、自己の生命を維持してゆく上で、必要な条件と考えられる。というのは、この雛は後日同巢のヨーロッパコマドリの雛や卵を、巢から排除してしまうからである。翌日の5月28日、カッコウの雛はまだ弱々しいが、かろうじて頭を持ち上げたり、口を開く力が具わってくる。5月29日午前8時、カッコウの雛より2日遅れて、ヨーロッパコマドリの雛が1羽、卵殻より出てくる。同日、ヨーロッパコマドリの卵が1箇、巢から数インチ下の土手に、排除されているのが発見される。カッコウの雛は相変わらず、ひ弱で頼りなく見えるが、わずか2昼夜の間に、大きさは孵化時の2倍に達する。黒ずんだ色は一段と増し、皮膚の色は青みがかった黒に見える。ヨーロッパコマドリの雛はカッコウの雛に比較して、約半分ほどの大きさしかない。淡いピンク色を帯びた黄色の皮膚は、黒くて長い綿毛で覆われている。このように、カッコウの雛が相手より大きいこともまた、巢中での生存競争に有利に働く。茶碗型の巢に、この大きな雛が中央部を占めることで、相手は両側のわずかばかりの空間に押し遣られ、安定した位置を占めることができない。この観察例の場合も、カッコウの雛が巢の中央部を占め、その片側にヨーロッパコマドリの雛が、そしてもう一方側にまだ孵化されない卵が配置されている。両側の狭い空間を占めるヨーロッパコマドリの雛と卵は、巢そのものが小さいことと相俟って、結果的に中央部のカッコウの雛を、両側から圧迫することになる。この接触や圧迫がカッコウの雛を苛立たせ、身を蹴く原因になるのである。他者の接触を嫌うこの雛は、苛立ちが最高潮に達した時、一連の運動を機械的に繰り返す。狭い巢のなかで、図体の大きいカッコウの雛がこのように身を蹴くこと自体、他者にとってどんなに危険であるか想像に難くない。特に卵の場合、小石のように堅いため、邪魔になるらしく、一層激しく体を動かす。この結果、遂に卵は雛の背の窪みに転り込む。雛は背中に触れられると最も苛立つことから、巢中で立ち上がるほど興奮する。従って、背中に乗った卵は巢外に放出されてしまうのである。ヨーロッパコマドリの雛の場合も、卵の場合同様、背に乗せられて、同じ運命を辿った。こうして、カッコウの雛だけが巢を独占し、仮親の世話を受けながら巣立つことになる。自然界で繰り返される凄惨な掟を見せつけられるのであるが、勝者にはそれなりの優位性が与えられているように思える。先ず、他者に先駆けて孵化することは、成長がそれだけ進んでおり、体力もあるということになる。また、巢が比較的浅狭であるのに加えて、体が倍も大きいことは、他者を排除する

のに好適と言える。更に、カッコウの背の窪みは、他者を背負うのに絶好の形を提供しているのである。これらの条件を具えられたカッコウの雛は、孵化後2、3日のうちに、他者を排除することが観察されている。孵化して17日目には、付近の木に止まれるようになるが、餌はまだ仮親に運んでもらわねばならない。この状態が3日間続くと、それ以後雛は姿を消すのである²。

作者は博物学者 Alfred Russel Wallace (1823—1913) の勧めもあって、この観察に取り組んだのであった。カッコウの托卵の習性については作者は鳥類学書や博物学者を通じて熟知していた筈である。作者の観察目的は、博士の勧めに応じて、そのような学説が実際正確なものか否か、直接観察することによって、確認することにあつた。翌年の1901年5月、作者は同じ場所にやって来たのであるが、やはり、ヨーロッパコマドリの卵が巢から落されているのを発見する。しかも、卵を産み付けた親も、これを抱卵した仮親も、前年と同じ親同士であることが推測されることから、二者は毎年同じ習性を繰り返してきたものと考えられる。

次に、巢から排除された雛はどのような運命を辿るのか述べることにする。ヨーロッパコマドリの母親はわが子を見殺しにする。巢中でカッコウの雛を抱きながら、わずか数インチ下に落下したわが子を見つめるだけで、何の手助けもしない。餌を運んで来ても、わが子に与えることはせず、再びカッコウの雛を暖め始める。作者は何時間も観察し続けたが、下で蹲るわが子を助ける仕種はなかった。飛ぶことは勿論のこと、まだ歩くこともできないその雛は、翌朝、飢えと寒さのために死んでいた。真上の巢中では、親鳥は何事もなかったかのように、カッコウの雛を暖めていた。イギリスではヨーロッパコマドリは鳥類中、最も賢い鳥と思われている。それがわが子を、しかも自らの腹から卵を産み、自らの体温で孵化したわが子を、見殺しにするのである。もしも鳴き声を発することができれば、事態は変わっていたであろうと、作者は考える。雛が空腹や苦痛のために鳴く時の声ほど、親鳥が興奮したり、感応するものはないからである。しかし、この雛の場合、孵化後間もない段階にあり、まだその能力は与えられてはいない。従って、カッコウの托卵の習性にとっては、³非常に都合な条件が揃っていることがわかるのである。

野鳥を人工的に飼育することは、それが幼鳥であれ、成鳥であれ、作者の最も嫌うところである。成鳥の場合、その飛翔や鳴き声の自由を、あるいは本来具わっている習性や魅力といったものを、束縛してしまうからである。巢から落され、死を待つヨーロッパコマドリを、作者の友人たちは家に持ち帰り、世話をしてはどうかと

勧める。彼はこれに同意しなかったが、それは鳥類学者としての立場から次のような理由を考えていたからである。先ず、雛の場合初期の段階では、1日に16時間に渡って、絶えず餌を与えねばならないからである。しかも、その幼い胃袋に適した餌、主として生きている小さなチョウヤガの幼虫を与えねばならない。第二に、親鳥の体温と同温度で1日中保温する必要がある。従って、雛に相応しい餌や保温を与えることができなければ、しかも的確な時間に餌を与えるのでなければ、その死は目に見えている。第三に、仮に上記の条件を満し、生き延びることができたとしても、人工的に飼育された雛は野性を喪失する。従って、自然界で育った場合と比較して、体が弱く、独立して生活ができないなど、虚弱になってしまう。第四に、何よりも親鳥の手解きがないままに育てられるために、鳥類界に縄張りのあることなど無知である。このため、同じヨーロッパコマドリ同士であっても、縄張りを荒らした場合は、殺されてしまうのである。⁴

作者は鳥類が受ける肉体的苦痛について言及しているのであるが、このことは友人たちの勧めにもかかわらず、落下して死を待つ雛を置き去りにした理由を説明するであろう。成鳥は死期に際し、大変な苦痛を伴うが、雛はそれが殆んどないため、自然のまま放っておいた方が良いという考えである。ヨーロッパコマドリの雛が、孵化後間もない時期に、仮に寒さに晒されたまま死に至ることがあっても、その場合、苦痛を殆んど感じないと作者は考える。成長期の初期段階では物事を感じたり、これを意識する能力がまだ十分に発達していないからである。反対に、意識や精神機能が十分発達した成鳥ほど、苦痛の度合は増すと言うのである。⁵精神機能の発達に即して、鳥類の苦痛の度合を述べる作者ではあるが、雛の死は心ある読者にとっては胸が痛むであろう。けれども、作者がここで言わんとする趣旨は、巢から排除され、親の庇護もなく自然死する雛の方が、かえって人間に飼育され、後日放鳥された時に、自然界の掟に順応できずに死んでゆくよりも、ましであることを述べたものである。托卵の習性を持つのはカッコウだけに限られるものではないが、この習性によって自然淘汰が行われ、適者のみが生存してゆく事実を知らされるのである。

II 自然思想

作者は6月、New Forestの広大な荒野にやって来る。そこは喬木は勿論のこと、灌木も見当らず、ただ生えているものと言えば、飢えたような、辛うじて足首の高さ

に達するヒース (heath) だけである。生えているヒースは絶えず刈られ、地面は燃料用に取り去られるために、このような様相を呈するに至った。この荒野を越えれば Exie という谷川が流れ、景観は一変する。谷に沿って自生するオーク (oak) の森が緑鮮やかに川を覆い、精神を爽快にするのである。荒野が飢えとメランコリイの感情を作者に与えたのに対して、果しなく続くオークの緑は治癒力を与えるのであった。その雰囲気は訪れる者の精神と調和して、過去が現に存在する幻想を抱かせるのである。⁶

作者が自然を眺める時、これを現象面から捕える場合と、精神面から捕える場合がある。更には、現象面から精神面へ連動し、幻想の世界に入っている場合もある。谷川に沿って果しなく続くオークの緑が美しいと述べる時、それは単にその現象を捕えて美しいと言っているに過ぎない。しかし、単調で気分を塞ぎ込む荒野を離れ、緑なす谷川を見た時、オアシスを流れる小川の如く、爽快な気分を味わったのは精神作用に因っているのである。また、現象から幻想への連動とは、視界から内奥の世界への移行と考えてよく、この手法は *A Traveller in Little Things* (1921) において成功し、幽玄な世界を醸し出している。同書の "The Return of the Chiff-Chaff" においても、また "Apple Blossoms and a Lost Village" においても、基本的には現実と過去とが連動を媒体に交錯し、詩情豊かな幻想の世界へ誘うのである。この書においては随所に、三者三様の自然へのアプローチが試みられている。特に第三のアプローチは作者の自然観のみならず、芸術観を理解する上で、重要なものと言える。⁷

谷川のオークの森は作者にとって、言葉では表現できないほど自然の新鮮さを自覚させた。その鮮緑は内奥の生命に至るまで込み込み、靈魂までも緑化させるほどであった。これに比較すると、ヒースの荒野はメランコリイな荒涼とした様相を呈するのであるが、広大な空間はまた、人間の精神を解放する性質をも共有する。作者はむしろ、このような開豁地にこそ、心身共に自然と結合できる絶対的自由があると書いたであろう。それは彼の敬愛する神秘詩人 Thomas Traherne からの、次の引用句に集約される思想に通じる。即ち、詩人が「太陽そのものが血管を通して流れ、天の衣に包まれ、星を頂き、全世界の唯一の継承者たるべき己を知って、始めて地上を正しく享受するのだ」⁸と言う時、そこには三次元の広大な空間と自己とが完全に融合し、一つになって呼吸する崇高さがある。作者にとって、太陽を遮る物もなく、風雨が自由に飛び交う開豁地こそ、人間の心身を解放する所なのであり、自然と一体になって「崇高な感情状態」を経験できる所なのである。彼は地上でのこのよ

うな生活を最高のものと考えていた。

作者の自然思想は、この書の次の言葉に明確に集約される。

The blue sky, the brown soil beneath, the grass, the trees, the animals, the wind, and rain, and sun, and stars are never strange to me; for I am in and of and am one with them; and my flesh and the soil are one, and the heat in my blood and in the sunshine are one, and winds and tempests and my passions are one.⁹

これは彼が Beaulieu 村の東方に広がるヒースの荒野にやって来て、古墳を前にして述べたものである。ここには自己と自然とが融合し、合体した思想が見られる。空も太陽も、地上の動植物も、また空間に存在する風雨も、作者と一体である。「私はそれらの中に存在し、それらから生まれ、それらと一体であるからだ」と明言する時、宇宙と空間と地上のそれぞれの存在が作者と一つになり、有機的な統一体を形成していることに気づくであろう。この有機的統一体、換言すれば、自己と対象との肉体的精神的同一化こそ、作者の思然思想の根本を成しているのである。その対象は天上や地上に限らず、*A Traveller in Little Things* に至っては地下の死者まで含まれ、広範である。

作者は荒野の孤独と沈黙に包まれ、落日を受けながら、古墳に眠る古代の死者に思いを馳せる。このように彼が古代の死者に関心を寄せるのは、それなりの理由があつてのことである。彼等と自然との関係は、それが古代人であれ、あるいは村人であれ、生活と密着したものであった。作者や現代人が自然を求めて遠方まで歩を運ばなくとも、彼等は自然のなかで生まれ、自然と共に調和した生活を送った筈である。彼等は生まれた時から自然と有機的に融合し、作者の理想とする生活を体験してきた。作者が彼等を同胞と呼び、親近感を抱くのは正しく、自然と自己を同一化していたからに他ならない。作者はこの世界を真の世界 (real world) と呼び、都会人は虚偽の生活をしているのだと決めつける。¹⁰ 自然保護や環境保全問題が叫ばれる今日を考えれば、彼の主張は、今日を予測して発言したか否かは別として、強烈な文明批判と受け取れる。この観点から、彼の思想は現在なお意義を有するのである。

自然と共存し、一体となって生活した古代人を、作者は同胞と呼ぶと述べたが、それは血縁関係にあることを意味する。彼は時々自分を「過去の生き残り」と考え、「姿を消した民族の滅びつつある残存者」と考える時がある。¹¹ ということは、彼は全く異質の文化と言語を持

ち、周囲の人々から孤立する瞬間を持つことを意味する。このような世界観は *Green Mansions* (1904) の女主人公の世界観へ通じる。彼女は滅亡した民族の最後の末裔として描かれ、周囲の者には理解できない言語を用いた。自然や動物を愛し、失われた自らの民族を熱心に探索する姿は、作者自身の同胞を求める姿勢を反映したものとと言える。彼が村人を愛し、その墓に佇み、死者と親しげに対話をする場面は *A Traveller in Little Things* に詳述されているが、これも彼の村人に対する同胞意識の反映であると言える。大都会ロンドンに寝起きしながら一生を送った彼が、そこに彼の意味する血縁を求め得なかったことや、理想的生活を見出せなかったことは、不幸であったと思われるかもしれない。だが、大都会に住み、異質の文化や人々に囲まれながら、彼は彼自身の思想に到達した。彼はある詩人の言葉を引用して「我々は歳月のなか¹²に生きるのではない。思想と感情のなか¹²に生きるのだ」と述べている。その思想と感情を抱懐するのに、ロンドンでの生活は支障を来したとは思えない。むしろ、大都会での経験が地方との対比を明確にし、思想や感情の形成を決定させたと言えるのではあるまいか。

III White 緑の地を訪ねて

Gilbert White (1720—93) は Izaak Walton (1593—1683) と並び、イギリス自然文学に特異な地位を築いている。後者の随筆 *The Compleat Angler* (1653) は、釣師と狐師の対話形式を用い、当時の血腥い内乱には全く無感心を装うかのように、野に遊び、釣竿をたれ、自然を謳歌する。これに対し White の *The Natural History of Selborne* (1789) は、彼の生まれたセルボーン教区で余生を送りながら、鳥や草木を綿密に観察した記録である。両者とも自然を相手に、時流に染まることなく、また政争に巻き込まれることもなく、冷静な態度を装っていたことは類似する。ただし、魚と鳥という具合に、その描いた対象には相違も見られる。Hudson が White の方により興味を示し、関心を寄せた一つの理由は、ツバメの習性を綿密な観察のもとに記録したからであろう。彼が White を知るのは16歳の時である。当時の彼はアルゼンチンのパンパスで、母の説く宗教に疑問を抱き、自然に対して特殊な感情を持っていた。このような時期に、彼の家に入出入りしていたある商人が、イギリスから White の著書を購入して、鳥好きの彼にプレゼントしたのである。この書は彼の少年時の悩みに対し、答えてはくれなかったけれども、その素晴らしさに何度

も読み返したと言う。¹³この事はアルゼンチンの地方に住み、自然に興味を持ち、鳥類を飽くことなく眺めていた少年に、大きな夢と刺激を与えた。White が著名な二人の博物学者に宛てた私信が名著となったように、彼もまた「スミソニアン学会」(the Smithsonian Institution) 及び「ロンドン動物学会」(the Zoological Society of London) のそれぞれの学者に、鳥類の観察記録を送っている。その鳥類のなかには White が観察の対象としたツバメ類も含まれ、営巣の様子や優美な羽性、あるいは渡りの状況などを記している。¹⁴その記録は私信の形式を用いたものであったが、その都度学会誌に掲載されていったことは、彼に自信と勇気を与えたであろうし、White のような博物学者になるべき指針を与えたに違いない。

彼の White を敬慕する気持は1874年に渡英した後とも変わることはなかった。1896年に始めて彼は Hampshire 州の遠隔地、Selborne 教区に到着する。地理上からその所在を説明すれば、White が自ら、「セルボーン教区はハンムプシャーの東端の一隅にあり、サセックス州と境を接し、サレー州からも遠くなく、ロンドンから南西約50マイルの所にある」と、第一信の冒頭で述べている通りである。ここは彼が生まれ、死んだ所であり、墓標もまたここに建てられている。作者がその墓標をようやく探し当てた時の様子は、*Birds and Man* (1901) のなかで、次のように記されている。

I spent hours groping about in the long rank grass of the churchyard in search of a memorial; and this, when found, turned out to be a diminutive headstone, in size and shape like a small, oval dinner-dish half-buried in the earth. I had to go down on my knees, and put aside the rank grass that covered it, just as when we look into a child's face we push back the unkempt hair from its forehead; and on the small stone were graven the two capitals, "G. W.," and beneath, "1793" the year of his death.¹⁶

念願かなって、ようやく発見した墓はごく小さいもので、伸び放題の草に覆われ、頭文字の G. W. と死亡年だけが刻まれた質素なものであった。Selborne という田舎の牧師補として、何の野心も抱かず、「何ら疾しいところがなかった静かな、おとなしい人」¹⁷にとり、その墓標とそこに刻まれた文字は、相応しいものに思える。作者はその墓標を前にした時、「目に見えぬ存在が、絶えず自分の近くに感じる」¹⁸を受けたと述べている。

1896年に続き、作者は2、3年後に再度この教区を訪

れ、更に1901年には三度目の訪問を試みている。遠隔地でありながら、風光明媚なため、昔からこの地を訪れる人は多く、ロンドンから、あるいは外国から、観光客がやって来るのである。しかし、その訪問者のうち、十中八九は White やその著作には無関心であり、あまり知らない。作者はこの教区で White が見た、あるいは見たであろうコオロギ (field cricket) やジャコウアオイ (must mallow)、あるいは各種のツバメ (swift, martin, swallow) 等を観察し、当時の状況と比較しながら感慨にふける。1902年にもまた訪れ、この時にはこの教区だけではなく、隣接の教区まで足をのばしている。いずれも White に縁の地、あるいは彼の足跡を辿っての訪問である。従って、教会やそれに付随する墓地、あるいはそこに生えるイチイ (yew) の老木に関する話題が多い。教会の与える美観に関し、作者は先人と解釈を異にするところがあり、興味深い。White は Hampshire の教会の多くは、尖塔がないために美観を損ねると考えた。新しい大きな教会には尖塔も鐘楼もあり、壮観に見えるかもしれないが、作者はそれよりも、このような所にはむしろ、小さな教会が相応しいのだという観点に立つ。彼は Priors Dean という村にある古い、小さな教会を探し求め、わずかばかりの墓石とイチイの古木—これらが全てであったが—を発見した時、孤独と侘しさの入り雑じった気分になりながら、心の中では平穏を感じている。人の気配とて感じられない、人里離れたこの村の、その小さな教会は、何世紀にも渡って風雨に絶え、蔭で覆われた建物であった。周囲の雰囲気から受ける孤独感や侘しさは、しかしながら、教会それ自体が永遠なる生命と太古以来の平穏を象徴するように思え、作者はその孤独感や侘しさを超越して、最高の魅力を感じている。古い村の教会墓地に目を移すと、そこには古い墓石が立ち並んでいる。彼が興味を示すのは、その古い墓石である。というのは、新しい墓石は画一的であるのに反し、古いものはその形がさまざまに魅力があること、また風雨に晒されたその碑文が個性的であること、更には碑文の周囲を飾る文様が象徴的で、美的感覚を満足させるからである。村の小さな教会には大抵古い大木が枝を広げている。その大木が殆んどイチイであることは、その土地に適した樹種であるからであろう。White が25年にも渡って奉職した Selborne 教区のイチイは、英国でも有数の大木として知られる。作者が訪れた当時、樹齢1000年を越え、なお生気に満ち、最大周囲27インチもあったと述べている。¹⁹彼は付近にある他の教会のイチイの老木にも言及しているのであるが、このような大木は墓石が年と共に変化し、やがて朽ちるのに対し、寿命が長く、常に変わらぬ姿を保持することから、これを地上の、あるいは

死者の守護神と見なすのである。

作者は付近の村を訪ねた時、White の村で起きた事件を聞くこともあった。Wolmer Forest という村で、彼は一老婦に宿を借りたのであるが、彼女はSelborneの生まれで、小さい頃のことを知っていた。彼女の母がWhiteのことをよく話してくれたことや、彼の名声は教区外にも広く伝わっていたことなどを、語ってくれたのである。その老婦はまた、父が飢えに苦しむ村人を扇動し、その廉で捕えられた「セルボーン暴徒」の話も語った。このセルボーン暴徒事件については、後年やはり、Selborne 生まれの別の人からも聞いていることから、かなり人口に膾炙したものらしい。この事件は1820年頃に起きたもので、Newland という男が革命家たちを集め、救貧院を襲い、家具を焼き捨てる。続いて、隣接の村Headley へ出かけ、新兵を募って、小隊を編成しようとした。しかし、彼等の大半は捕えられて、捕虜となり、Winchester に送られている。そこで彼等は裁判にかけられ、流刑に処せられたのであるが、扇動者のNewlandは逃亡に成功する。しかし、家に戻った所を捕えられ、Winchester に連行されるのである。飢えに苦しむ農民が、暴動を起さざるを得なかった情状を酌量され、やがて彼は釈放されて事無きを得る²⁰。彼がWinchester に連行された後、妻が2歳になる男の子を抱き、厳寒時に慰問の旅に出かける様子は、*An old Thorn* (1911)において、夫Johnnieを獄中訪問する妻子の場面を思わせる。Johnnieは妻子の願いも空しく、一頭の羊を盗んだ廉で処刑されてしまうのであるが、Newlandの場合は生き長らえて、幸福な死を遂げている。その死屍は子孫の記憶に刻み込むため、家族の願いにより、教会の墓地から離れたイチイのそばに埋葬される。このように、作者が教会やその付属墓地に示す関心は、村人に示す関心同様、ますます強化され、これらを題材にしたエッセイは*A Traveller in Little Things*において、後年見事に結晶するのである。

Ⅳ ハンムプシャー人の類型

作者が民族や人種に関心を寄せていた事実は、いくつかの作品において、これを断片的に扱っていることから、推測される。この作品においても、ハンムプシャー人を類型化し、私論を展開したことは、これを証明するであろう。前作*Nature in Downland*においては、野生生物のもろもろを対象にし、これを客観的に描写してきた作者が、*Hampshire Days*において、その傾向を保持しながらも、一転して人間に目を向けた真意が何で

あるのか定かではない。しかしながら、上記の如く、民族・人種という問題が作者と深い関係にあることは確かである。この問題を彼がどのように考え、またそれが彼にとってどのような意味を持つのか、次に述べてみたい。

近隣のSomerset, Devon, Wilts, Dorset 各州の住民に比較して、ハンムプシャー州の住民の場合、類似性も見られるが、相違点もまた明確である。一般的に言えることは、この住民は近隣各州の住民に比べると、興味に欠ける。即ち、器量、皮膚の赤味、目の純粋な色彩、活力、活気、ユーモアにおいて劣るということである²¹。これは近隣諸州との比較において、作者が一般的な印象を述べたものであり、全住民がそうであるというわけではない。これら弱点の原因は、気候・風土・食物・習慣等の地理的条件が作用しているのは勿論であるが、これ以上に人種的要因が大きいと作者は考える。ゲルマン民族の侵入以降、イギリスはしばしば外国勢力との混血を余儀なくされてきた。それ以前の歴史を辿れば、何時の時代からこれを繰り返してきたか判明しにくい。作者は想像し得る限り、どのような支配者がどのような被支配者と混血し、その混血の程度や割合によって、どのような新しい人種を生じたかを、明らかにしようと努める。

ハンムプシャー州に関して言えば、5世紀頃からブリテン島に侵入を開始したゲルマン民族の一派、ジュート族(the Jutes)が、この州の南部に定住するようになったことや、ワイト島(the Isle of Wight)にはこのタイプの住人の現存が確認されている。これに対し、この州の北部にはアングロ・サクソン族(the Anglo Saxons)のタイプの住人が見られる。大都市や地方都市においては、混血があまりにも複雑化しているために、作者は村落の農業や牧畜業に従事する人々を観察対象に選び、これを4タイプの人種に類別する。大多数の人間はこのタイプに類別可能とされるが、この範疇に入らない人々も少数おり、これについては論外にしてある。

第1のタイプとして、「ブロンド型」(the blond type)があげられる。州内全人口の半数以上はこのタイプに属し、北部に顕著に見られ、近隣のSussex州からWiltshire州まで、広範に及んでいる。姿・容貌はまずまずであるが、肉体的な、あるいは精神的な面で、明るさに欠ける傾向がある。このタイプの代表例を女性にとり、その特徴を挙げれば次のようになる。(1)背丈は中背(2)顔は多少卵形の気味があって、大変美しい(3)鼻は直線のか、あるいは鉤鼻で、小さくはない(4)口は形良いけれども、唇は薄すぎる(5)髪はきまって茶色であるが、光沢に欠ける(6)目は灰青色で瞳は小さい(7)皮膚は青白い、または黒ずんでおり、さもなければくすんで見える。これらの特徴を

述べながら、作者は頬にもう少しバラ色を、唇に深紅色を、髪には光沢と弾力性を、そして目には輝きを求めるのである。²²要するに、このタイプの女性は、今一つ何か欠けているために、魅力を損ねていることを指摘する。このタイプの女性はまたほっそりしており、胸は平べったく、年とともに痩せてゆく。痩せてゆく原因を作者は、貧血性や日常飲む茶、あるいは生活の貧しさに求めるが、それは科学的な根拠に基づいたものではなく、あくまでも推測の域を出ない。興味のあることに、彼はこのタイプの人間をアングロ・サクソン人との混血と考えていることである。それではアングロ・サクソン人はいかなる人種と混血したのであろうか。彼の推測では、アングロ・サクソン人は、紀元前1世紀ベルギーに住み、ベルギー人の祖となったベルガエ族 (the Belgic) か、それともローマ軍進攻時に英国南部に住んでいたケルト人一派の、ブリトン人 (the Brythonic) と混血したろうと考える。しかしながら、この「ブロンド型」の人間は、体つきも顔も、ケルト人にも似ていなければ、サクソン人にも似ていないのである。そこで彼は、ブリトン人はそれ以前に、もっと古い人種、例えばゴエデル人 (the Goidels) と混血していたであろうと考える。²³何れにしても、このタイプはアングロ・サクソン人の血が混った人間であること、そしてこのアングロ・サクソン人及び、その混血者たる「ブロンド型」の人間に対し、作者は心底からこれを称賛していないことを理解しておく必要がある。その理由を考えてみると、彼自身にケルトの血が混っているからであろう。

第2は同じく「ブロンド型」の範疇に属するのであるが、サクソン族の特徴が著しいタイプの人間で、「サクソン型」 (the Saxon type) とでも言うてよいであろう。このタイプの男性の場合、体つきがずんぐりして重量感があること、頭は丸く、目は青で、薄色の頭髪をしている等に、特徴がある。精神面から言うと、繊細で魅力ある特質に欠ける傾向があることを別にすれば、頑強で不屈な万能型の人間といえる。力強い動物を思わせる性格を有するけれども、大酒飲みはこのタイプに多い。町村でよく見られるこのタイプの大酒飲みは、皮膚に染みができ、目は涙ぐんで見える。征服民族たる彼等の顔には、優越感が現われ、獣性にも増して攻撃的な表情をちらつかせている。²⁴第1タイプの人間が、動作が緩慢で、疲労しきった表情に見え、醜な目、青白い顔をしているのに比べ、てこのタイプは力強く、精力絶倫である。

第3のタイプに「ダーク型」 (the dark type) がある。このタイプは州南部に見られ、平均的な身長、幾分卵型の顔、黒ずんだ髪と目、それにしばしば黒ずんだ皮膚をしている。また、身長、姿、頭形、容貌において、第1

タイプの「ブロンド型」に酷似していることも、その大きな特徴となっている。この両タイプは、作者も述べているように、長年混血を繰り返してできた同一民族の人間であるのかも知れない。ただし、気質は相異なり、このダーク型の方がブロンド型よりも暖かく、機敏で、それに思い遣りがある。

第4は同じく「ダーク型」ではあるが、便宜上これを「イベリアン型」 (the Iberian type) として限定しておく。人口比率からいえば、ごく少数派に属するが、作者の最も関心を寄せるタイプである。このタイプは、小さな身体、幅の狭い頭、真っ黒な髪、黒い目、茶色の皮膚、そして機敏な動作等に外見上の特徴が見られる。古代イベリア民族 (the Iberian race) は新石器時代、既にイギリスに移住していたと考えられ、以来征服民族や異民族に同化されながらも、その肉体的特徴を保持し続けたと考えられる。²⁵イギリスでは北部や西部に見られ、南部でも Hampshire, Wiltshire, Dorset 各州の村人のなかに見られる。精神面において、このタイプの人間は聡明であり、悟りが速いが、保持力や実用性の点ではサクソン人に劣る。しかし、想像力、公平無私、同情心といった点では勝り、交際時に階級意識を感じさせることもない。このタイプの女性の場合、生き生きして、ユーモアあり、変化に富み、客の持て成しが上手である。

以上の通り、作者はこの州の村人を中心に、これを大きく「ブロンド型」と「ダーク型」に分け、更にそれぞれを2分して、計4つの型に類別している。そして、何世紀にも渡り民族間の混血を繰り返しながらも、それぞれのタイプになお原民族の稟質が生き続けていることを、証明しようとしたのである。注目すべきは「ブロンド型」より「ダーク型」を好ましいタイプと考え、特に「イベリアン型」に対しては、長い間失われていた世界の再来を期待する。この聡明で多才な新石器時代の末裔が、何千年か後に復活することを夢見るのである。前述したように、作者は時として自身を失われゆく民族の残存者と考えた。全く異質の文化に住み、全く異質の言語界に存在していると考えたのである。彼のこのような考えは、新石器時代以来、混血を繰り返しながらも生きてきた少数派のイベリア人と無関係ではなさそうである。彼のこの考えはまた、1904年発表の *Green Mansions* に見られる失われゆく民族の象徴とも、無縁ではない。彼もまた、女主人公同様、失われた民族の祖先を追い求めていたのではないかと思われるからである。その失われた祖先の子孫を、彼はイベリアン型の人間に、あるいは素朴な村人のなかに発見しようとしたのではないだろうか。このような見解が可能であるならば、女主人公の同族を求める姿も、また村人を同胞視する作者の態度

も、自然に理解できるのである。

V 結語

Hampshire Days は博物学的な要素を多分に含んだエッセイであるという点で、前作の *Nature in Downland* を踏襲したものである。即ち、英国丘陵地帯で観察される博物学上の諸対象を、今度はハンムプシャー州に場所を移して、それらの対象を採録したのである。その一例として、カッコウの托卵の習性を取りあげ、作者の観察態度やその方法について述べた。Haymaker が、動物の生態を描かせては Hudson の右に出る者はいないと述べているように、²⁷ その習性は章中最も強い印象を与えている。この書は彼の代表作にはなっていないけれども、自然思想や民族問題を扱い、これに明確な見解を与えている点で、重要視されて良いであろう。自然思想に関して言えば、この書において始めて、処女作以来一貫して描かれる自然と作者との密接な関係を、論理的に説明しているからである。彼の自然愛好、自然崇拜、汎神論的思考等は既にそれまでの作品中に述べられてはいた。しかし、これら彼の自然観を形成する根本思想は何であったかは明確に説明されていなかったのである。それがこの書によって明確にされたことは、彼の思想究明に大きな意義を与えたと言える。彼が自然界や宇宙、そしてそこに内在する個々の対象と、有機的同一体であると表白したことで、それまでの懸案は一挙に解決されるのである。彼が鳥類を、「翼ある人々」と呼び、「私の翼ある子供たち」と呼ぶのは、単に愛玩感情から発した呼称ではない。それは彼にとって、血を分けた同胞を意味するのであり、人間とは別種のものでないからである。自然界の個々の対象を愛好し、これを崇拜する気持も、その根本思想を把握することにより、始めて正しい解釈が得られるのである。この意味で、代表作とは見なされてはいないけれども、このエッセイは重要な意義を有するのである。

この作品にはまた、物質文明に対する批判も散見される。作者は Itchen 川上流の Swarraton 村を訪れるが、ある老農婦との会話から、当時の村の生活が自給自足経済から、流通経済へ移転したことがわかる。その老農婦が子供の時分には、食料となるものは一切自らの手で作り、これを買って食べるようなことはなかった。パンを焼くにしても、ビールを醸造するにしても、みな自分たちの手でこれを行った。しかも、その作り方や技術は親から子へ何代となく受け継がれてきたのである。しかし、当時は流通経済の発展に伴い、お茶やココアは勿

論、パンまでも店から買わねばならない状態になっていた。当時の大都市ではごく当然と思われるこの変化は、老農婦にとっては口惜しい現象なのである。ニワトコ酒 (elderberry wine) を造っても、だれも欲しがらず、店から買う物を何でも上等視する風潮に変わってしまった。冬には体を温めてくれ、味も良かったこの酒は、もはやその生命を断たれようとしているのである。昔はだれもが豚を飼っていて、ポークもベーコンも自らの手で作った。色は良く、その味は「口の中でバターのように溶けた」²⁸ ののである。しかし、当時は農家でさえも、悪臭問題のため、豚を飼うことができなくなっていた。この場面から推測されることは、老農婦の少女時代が一変してしまい、今や地方の隅々まで、流通経済が浸透していることを物語る。新しい時代の波に抗し、なお昔の生活様式を変えようとする老婦の一徹な姿が事実に描かれているが、これは単なる彼女のノスタルジアではない。老婦に姿を変えた作者自身の、物質万能主義に対する強烈な反抗なのである。作者の理想とする世界は、これまで述べたように、まだ機械化されていない、自然と結びついた世界にある。牛が長閑かに草を食み、小鳥が大空を自由に飛翔する世界である。しかし、その世界は文明の進歩とともに、人間に征服され続けられた結果、次第に失われていった。それと同時に野生生物の棲息場所も、年々縮小されていった。このことは、現在環境保全が叫ばれ、野生生物保護が世界的な問題になっていることから、理解されるであろう。作者は当時、これに似た現象を直接目の当りに見ていた。ここに彼の悲哀があるのであり、時代への反抗精神もあるのである。彼はまだ物質文明の押し寄せない、遠い過去にその理想を求めた。イベリア人やケルト人に好意を寄せ、彼等に先祖返りを夢見たのも、その時代の自然と調和した彼等の人生に、意義を見出したからに他ならない。このように見ると、作者の自然思想も、古代民族志向も、あるいは野生生物愛好も、それぞれ個別的なものでありながら、彼にとっては互いに関連し合った関係にあったと言える。

Notes

- 1 W. H. Hudson, *British Birds in The Collected Works of W. H. Hudson* (London: Dent, 1923), pp. 269-70.
- 2 W. H. Hudson, *Hampshire Days in The Collected Works of W. H. Hudson* (London: Dent, 1923), pp. 15-217.
- 3 Ibid., pp. 22-23.

- 4 Ibid., pp. 23-24.
- 5 Ibid., pp. 24-27.
- 6 Ibid., pp. 29-36.
- 7 佐藤幸正「*A Traveller in Little Things* における W. H. Hudson のエッセイ」『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』第19号（1983年）pp. 75-77.
- 8 *Hampshire Days* (London, 1923), p. 38.
- 9 Ibid., p. 47.
- 10 Ibid., p. 48.
- 11 Ibid., p. 47.
- 12 Ibid., p. 46.
- 13 W. H. Hudson, *Far Away and Long Ago* in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London, 1923), pp. 338-39.
- 14 W. H. Hudson, *Letters on the Ornithology of Buenos Ayres*, ed. by David R. Dewar (Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, 1951), pp. 79-84.
- 15 Gilbert White, *The Natural History of Selborne* (London: The Cresset Press, 1960), p. 3.
- 16 W. H. Hudson, *Birds and Man* (London: Longmans, Green, and co., 1901), p. 298.
- 17 Ibid., p. 297.
- 18 Ibid., p. 299.
- 19 *Hampshire Days* (London, 1923), p. 198.
- 20 Ibid., pp. 206-07.
- 21 Ibid., p. 221.
- 22 Ibid., p. 225.
- 23 Ibid., p. 227.
- 24 Ibid., p. 228.
- 25 Ibid., p. 233.
- 26 Ibid., pp. 236-37.
- 27 Richard E. Haymaker, *From Pampas to Hedgerows and Downs* (New York: Bookman Associates, 1954), p. 117.
- 28 *Hampshire Days* (London, 1923), p. 301.